

## 第4回高等学校改革プラン推進委員会（第三推進委員会）議事録

- 1 日時 平成17年7月20日（水）午前9時30分～午前11時20分
- 2 場所 長野県飯田高等学校 会議室
- 3 出席委員

池上 昭雄委員長	熊谷 秀男委員
小坂 樫男委員	川島 一慶委員
岡庭 一雄委員	丸茂 貴子委員
小林 辰興委員	小池 博委員
小口 武男委員	関 哲夫委員
北原 曜委員	藤本 功委員

### 4 開会

（野村主幹教育支援主事）

それでは、お集まりのようですので、委員長さん、お願いいたします。

（池上委員長）

おはようございます。

それでは、まず前回の資料説明を伺っておきたいと思います。

### 5 資料説明

高校教育課野村主幹教育支援主事から説明（説明内容省略）

（吉江高校教育課長）

補足を、冒頭にさせていただきます。

資料7と8につきましては、先ほどご説明申し上げましたように、過日行われました第1推進委員会で、すでに提出させていただいた資料でございますが、資料の8は例の高等学校改革プランの検討委員会の資料がもしございましたら、資料ページのP16に出ているデータを加工した限りの数字だということなものですから、また報告書があればご覧いただきたいと思っている次第でございます。

（池上委員長）

ありがとうございました。

質疑応答に入る前に、藤本委員からデータを同じような側面を出していただきました。これをちょっと説明してください。

( 藤本委員 )

事務局のほうからもデータが出ておりますので、私のデータも比べていただければと思います。提示いたしました。『職業科の生徒に対する意識調査』というデータです。

昨年 10 月末に、全日制の職業高校、職業科を持つ高等学校 31 校にアンケートをお願いして、22 校から回答をいただきました。生徒数でいうと 861 名、農業 195 名、工業 382 名、商業 284 名の、3 年生で、1 年生ではありません。時間がありませんので、さっと読みますけれども、1 番が中学 3 年時で職業高校への入学をどう考えていたか、3 年前のことですけれども 2 ページへ行きます。これを見ていただければ、1 番と 2 番、「強く希望した」「どちらかといえば希望した」というのが、合わせて 7 割強ということになっております。

それから問の 2 番ですが、希望した理由ですが、3 ページへ行きます。3 年生のアンケートですから、7 番の資格、検定が取得できるという生徒が、意外と多く、しかも商業科での回答が非常に突出している。

2 番と 3 番ですが、2 番は就職に有利、3 番は好きなことが学べるですが、これも見ていただきますと、農業科の生徒というのは、就職に有利と考えていないのですが、3 番の好きなことが学べるのだというのが、非常に突出している。

それに比べて商業の生徒は、2 番の就職に有利という子が非常に多いのですが、好きなことが学べるのだという、3 番はちょっと少ない。だから商業科では就職に有利だと、農業科は農業が好きなのだという子が入学している。それからその下から 3 ページ、これは明らかに普通化志望ということになっておりますので、それはご覧になってください。

それから 4 ページの下から、中学校 3 年生時点での高校卒業後の進路ということですが、5 ページにいきますと 1 番と 2 番を足しました大学と専門学校というのが 5 割から 6 割ということですので、中学校 3 年生段階でも職業高校を出た後は進学志向が非常に強いということが分かります。

6 ページへ行きます。

「職業高校で 3 年間学んだ感想」ということで、6 ページのところにあります。満足であった、やや満足だと答えた生徒が非常に多いわけですが、特に工業科は其中で満足だというパーセントが少なくなっております。それから農業科は非常に満足であるという生徒が多いということでございます。やはりここでも、「農業が好きだ」という子どもが来ているのかなと思います。

それから 7 ページへ行きます。

満足、またどちらかといえば満足と答えた理由ですが 8 ページへ行きます。8 ページへ行きますと、やはり資格取得というのがかなりです。ここでも商業科の特色があります。それから 2 番の専門の知識が身に付いた、というのかなり多いと思います。

それから、やはり農業が好きだったという 1 番の農業科の生徒が多いのも分かります。それから不満だった理由が、明らかに 1 番の職業教科が好きでなかったのが 9 ページのグラフからも分かります。

9 ページの 8 番に行きますけれども、卒業後の進路で、これは 3 年生で 10 月末ですから、進路はもうかなり決まっているわけですが、卒業後の進路はどうですかということで、9 ページですが、大学、専門学校、就職、おのあの専門分野に関係したところか、というアンケートを取りました。

10 ページの下のグラフを見ていただきますと、それほど大きな差はありませんが、専門分野に関係した方面に行ったという生徒と、行かないという生徒が半々になっている。11 ページのグラフは、10 ページの下のグラフの 1 と 3、2 と 4 を足していますが、前の質問の大学および専門学校、就職関係ですが、1+3+5 と、2+4+6 というのは、すべてを含めて関係した方面に進んでいるかどうかというのですが、工業高校では、やはり関係した方面に進んでいます、やはり商業高校ではなかなか勉強した方面に進んでいない。大体半々ぐらいか、どちらかといえば関係していない方面に進んでいる、そんな気がします。

それから、職業高校での 3 年間の職業教育についてどう考えておりますかという 11 ページですが、12 ページにグラフが描いてあります。もちろん生徒は 5 番のちょうどよかったが多いのは当然ですが、そうはいっても専門教育をもうちょっと勉強したかったと、どちらかといえば専門教育をもうちょっと勉強したかったという 3 番と 4 番もかなりの数で、専門教育を、あまり希薄化しないほうがいいという気がします。

農、工、商業科の 800 名ばかりの生徒を対象にしたものです、比較していただければと思います。

もう 1 枚は飯田工業高校の生徒で、昨年 10 月に「飯田工業高校改革プラン」でアンケートを実施しました。2 枚のプリントがお手元に配ってあります。昨年の 10 月です。

見ていただければ分かりますが、2 ページ目の裏ですが、もし飯田工業高校がなかったらということで、工業の勉強ができないのですが、63%の人があきらめる、22%の人が駒ヶ根市、駒工ですが、もしかしたら通うと。さらに伊那も若干ありますけれども、そんなようなデータもあります。

ご参考に、よろしくお願いいたします。

## 6 議事

(池上委員長)

ありがとうございました。

それでは、これよりご説明の内容についての質疑を行いたいと思います。

質問のある方は、どうぞお願いします。

すぐにはでないようですので、私のほうからお願いをいたしたいと思います。

資料 8 の先ほど事務局から説明があった内容でございますが、経常コストの中に学校運営費用を入れるのお話でございます。そういうことです。

そうしますと、学校運営費用費用を経常コストから引きますと、これは人件費という認識でよろしいですか。

(野村主幹教育支援主事)

人件費ということで考えていただいていいと思います。

(池上委員長)

そうすると、運営費用というのが、私はよく分からないのですが、それはどんな内容が入っているのでしょうか。

（野村主幹教育支援主事）

学校を運営するものですので、学校修繕とか、例えば旅費ですとか、もろもろすべて含まれていると考えてよろしいかと思います。

（池上委員長）

私は、その会計がよく分からないのでいけないのですが、企業会計と違うと思いますが、運営の費用と言いましたが、例えば学校の建設費とか、逆に償却化とかという側面はどのような考え方をすれば、よろしいですか。

（吉江高校教育課長）

それについてお答えいたします。

企業会計と違いまして、県の会計の場合、市町村会計も同様でございますが、歳入と支出という単純な分けになっておりまして、そういう意味で考えますと、単なる歳出という位置付けでございますから、今、お話がございましたような、減価償却費というようなものは一切含まれていないような状況です。

ですからここで、お示しておりますので、例えば学校が使う電気、水道、あるいはガスとか、あるいは燃料費とか、そういうようなものを含めての内容が入っているということでご理解いただきたいと思います。

（池上委員長）

ありがとうございました。

これは、そうすると例えば固定資産の、こういうのは別会計ということでよろしいですね。分かりました。

ご質問をお願いしたいと思います。

（小林委員）

今、少し感じたわけですが、この学校運営費用というのは、先ほど減価償却というのは別としてというお話でしたが、いわゆる人件費以外のもののすべてが、学校運営費用と考えていいのか。それで、その中に人件費ではないが、人件費以上にかかる先程言っていた旅費等が入っているわけですね。

そうするとこれを見ると、人件費が圧倒的に多いということがこの資料でわかってくるわけです。今のところを、ちょっと確認しておきます。

（吉江高校教育課長）

ちょっとその関係のご質問にお答えする意味で、資料7をご覧くださいと思います。その中に教育費というものがございまして、その教育費に対する、いわゆる高校教育課の決算額・予算額というものがございまして、高校教育課の予算にまいりますと、このうちの90%が人件費でございまして、それで今、私が申し上げた人件費の中には旅費は含まれておりません。教育委員会全体の予算の中に占める割合も、県費までは知りませんが、89%程度でしたか、ちょっと確実な数字が記録として出ておりませんが、高校教育課だけでいき

ますと、その90%が人件費という位置付けになっております。

そんなことで、今、ご質問いただいた案件で申し上げますと、旅費は運営費の中に当然入ってきておりますけれども、それ以外のものがある意味で人件費であると、そういうことでご理解していただきたいと思います。

(池上委員長)

ありがとうございました。

ほかに、ご質問をどうぞ。

(熊谷委員)

この人件費でございますが、行政職員は教員を含めた人件費になるわけですか。

(吉江高校教育課長)

当然ながら、全部含めた内容ということで、先ほどもちょっと申し上げましたように、これは一見真新しい資料のようにご覧いただけるかと思うのですが、冒頭にも申し上げたように、最終報告の資料編のP16に既に出ている内容です。

それで既に出ている内容を、例えばここでイメージしたように、3学級規模と4学級規模が仮に再編整備の対象として考えた場合であれば、それは当然ながら7学級規模ぐらいになるでしょうと。それをこうした場合には、このぐらいの数字になるというようなものを作らせていただいたということです。

これは具体的に、どこの学校とどこの学校というようなイメージは、全くしておりません。当然ながら、資料P16にお示ししてあります内容も、全体の平均値で出しておりますので、イメージとすれば、それぞれの組み合わせによっていろいろ変わってくると。だからこれをもって、単純には議論できないという内容であることは事実でございます。

ただ参考までに、過日こちらの委員会以外にも第一推進委員会におきましても、何か資料はないかということで、私ども基本的には現在、議会等で直接質問に応じましても、責任をもってお出しする資料としては、いわゆる経費の関係は今のところはもっていないというのが大前提であります。

そう申しますのは、組み合わせが違ふことによりまして、当然経費は変わってくると思います。そういう意味で考えますと、具体的な数字として持ち上がっているのは現時点においてはありません。たまたま報告書にある数字を、そういうことで加工させていただいたものがここにあるということでご理解いただければと思います。

(池上委員長)

今のお話でございますが、しかし議論が進行してその世界に入り込みますと、幾つかのシミュレーションが数多く出てまいりまして、その場合には数字をお決めになるという機会が多いと思いますが。

（吉江高校教育課長）

今の委員長さんのご質問に対しては、実はほかの委員会におきましても、その内容について十分に委員長さんをはじめ、各委員の皆さんがご満足いただけるものかどうかということについては、私どもとして確約を申し上げにくい点はあるのですが、可能な限りご要望にお応えしてまいりたいと思います。

（熊谷委員）

単純なことです。統合すると行政職員がB高校より減っているというのは、これはこういった効果が出るということですか。7.6が7.3になっている。

（吉江高校教育課長）

これはひとつの平均値で出しておりますので、その平均値による例えということでお考えいただきたいというふうに感じております。

ですから小数点以下まで出てしまっていますが、これはたまたま学校の規模によりまして、職員が数が微妙にある程度動きますので、それによつての次第でございます。

（熊谷委員）

実際は高いですか。

（吉江高校教育課長）

ええ。ですから基本的にはイコール、プラスにはもちろんならないということとはご理解いただきたいと思います。

（池上委員長）

はい、ありがとうございました。

（岡庭委員）

なかなか事務局の方で答えたがらないというところがあったことですが、我々が考えるには今回の高校改革プランの根幹にある財政問題、それは私たち自治体を担っているものには一生懸命やっていくのに当たり前の話だと思っておりますが、三位一体の改革、あるいは地方交付税の問題がある中で、一般財源である、要するに高校教育的な削減ということは当然考えなければならない。そういう会計の中で高校改革のひとつの取組をつなげていく。

それで、今回は県教育委員会が再編案を出したわけですが、この再編案によってどのぐらいの財政的な効果を期待するのか。そして、再編案の中で、例えば総合学科をつくっていくときには、ある意味では費用が必要になってくるだろうということから考えてみて、どのくらい再編案により財政効果があるのかということについては、ある程度明確にすべきではないかと私は思いますが、そういうものを持ち合わせているのか、もし持ち合わせているとすれば、これはやはり公表をすべきではないかと思っているわけですが、よろしくお願ひいたします。

(吉江高校教育課長)

今の岡庭委員さんからご意見をちょうだいいたしまして、たまたま本日どなたかご用意をいただきましてお配りいただいた資料の中に、南信州の連合でもいろいろな議論があって、その中では財政問題というようなご質問もあったということでございますが、私ども基本的には第一義的に、今の学校数をそのまま維持していた場合には、恐らく募集定員の削減だけでは学校規模は維持できないのではないかと考えております。

それで、学校規模が維持できないということは、いろいろなサイドから学ぶ生徒のためにはならないだろうという前提のもとに、今回の高等学校の改革ということを議論いたしたいという前提にたっております。

だからそういう意味で、一義的な議論とすれば、当然ながら今後の少子化を見据えた上、あるいは今まで一気に激減を続けていた少子化を見据えた上での内容だということでご理解いただきたいと思います。

ただ、結果的に財政のお話というのは、ある意味で議論の俎上に乗ってしまいますので、最終報告の中にも、国やあるいは都道府県の財政状況のような議論もされていたのは事実でございます。

それを受けまして、今のご質問に対してですが、私どもは今の時点におきまして、先ほども若干申し上げましたように、過日閉会になりました6月定例県議会におきまして、そのような財政絡みのシミュレーションといいますが、数字を持ち合わせていたのかというようなご質問に対しまして、現時点においては持ち合わせていないというお話を申し上げます。

私どもが、先にこの数字を出すとすれば、責任を持ってお出ししなければいけないだろうと数字というものは、どうしても独り歩きしてしまいますので、そうした場合にはある程度再編整備の対象となる学校のイメージが固まりませんと、なかなかマイナス要素、プラス要素含めまして、お出しづらいということの中で、現時点において出す資料としてはご用意できないというのが現状でございます。

そんなことで、先ほど見ていただきましたように、以前お出しした資料を加工したものををご用意させていただきました。

(池上委員長)

ありがとうございました。

ほかにご質問はございますか。

(岡庭委員)

これはかなり、高校教育課と私との感覚の違いがあると思っています。そういうようなお話だから、例えば飯田で行われたシンポジウムのときに、「そういうことなら30人学級をつくったらどうだ」という議論になってくるわけです。

そのことが、全県的に支持されたら、高校教育課としてそれが実現できるのかことかと。少人数学校がいいのか、悪いのかという議論は、どこでも、ある議論としてされていないわけです。

そのところについては、やはりもう少し明確にしていけないと議論は進んでいかない

というふうに思っています。

これは全く意見であります。この第3通学区で、それを議論するかということもあるわけですが、私とすれば、どうもその点では納得はいかないということでもあります。

（吉江高校教育課長）

ほかの地域も含めまして、今の40人規模がいいのかどうかというご議論はいただいております。ただこれにつきましては、実はこの第3通学区以外に、ほかの委員会におきましても、今後この議論があれば、ぜひお願いしてまいりたいと思っておりますが、私どもが大前提としておりますのが、あくまでも40人規模学級で、編成をするということが大前提でございます。

これはある意味で、それぞれの委員会におきまして、特色ある学校づくりということで、現在進めておりますのが、少人数規模による学校形態、例えばの話が選択とか、あるいは習熟度別とか、そういうような意味合いにおけるような少人数学級ということは当然今後とも今もありますし、今後も当然ご提案いただける内容だと思っておりますが、それでも各委員会におきまして、ご議論いただく場合には40人の規模を前提にぜひご議論をいただきたいと思えます。

過日も、若干私は飯田のシンポジウムのときにも申し上げましたが、現在ご案内のように、小学4年までが30人規模学級というのを実践しておりまして、5年生、6年生につきましては、市町村からのご負担をちょうだいいたしながら進めていくという現状で、まだ中学3年生までを含めて、40規模が30人規模学級等に至っている現状ではございません。

そんなことを考えた段階、またさらに申し上げますと、それぞれの生徒さんによりまして、その発達課程による編成というのは当然違っていると思います。それを考えて、高校におきまして将来的にどうなるかはさておいて、現時点においては40人規模で今回の高校改革については、ぜひ議論をお願いしたいと思っている次第であります。

（池上委員長）

ありがとうございました。

心情を吐露いたしますと、実は私も少しそのところは、もともと甘いのではないかという認識を持っていました。従いまして、いろいろな議論が散乱してなかなかまとめるという側面は、財政をしっかりと確定していないというところにあるのではないかというふうに私は思っています。

将来、それをしっかり固めていただく資料を出していただいて、そこで我々は判断させていただくということではないかと思っておりますので、2回目の折には財政問題ありきというふうにコンセンサスを取らせていただきましたが、ぜひまよろしく願いいたします。

ほかにご意見はございますでしょうか。



( 藤本委員 )

30 人学級に対しては、県はそのような一貫した方針ですが、県会でも多くの議員さんがぜひ 30 人学級を高校でということをかなり質問されたとき、宮澤委員長さんは「まさに議員さんの言われることは正論である」と一旦発言されました。私は、宮澤委員長は県民の意見を代弁されたと思います。

そのあと、あわてて、当面はということで、多分答弁していたと思うのですが。だから少なくとも、もう小学校 4 年生まできて、あと中学 3 年、高校までということは、当面はということでも、何年後には考えていい、少なくともひとつのシミュレーションの中にあってもいいのではないかと思います。それで、私も前回、他県の 30 人学級は少なくとも、職業高校でかなりやられているのですが、そういうデータも出していただいて、少なくともシミュレーションの中では、そういう方向でぜひ議論していただきたいという気がします。

( 池上委員長 )

ありがとうございました。

これについて、事務局いかがですか。

( 吉江高校教育課長 )

先ほど来申し上げておりますように、30 人規模学級につきましても、小学校においても若干なっていないところもあるというのが現状です。

それと当然ながら中学校には、現時点では至っていないのが現状ということは皆さんご理解いただきたいと思います。それとさらに申し上げますと、私どもこれは先ほど申し上げましたように、現時点ではという言葉前置きの上ですが、あくまでも 40 人規模を適当と考えておりまして、さらに申し上げますと、よその県の形態で、例えばそうじゃないところもあるのではないかなというようなご議論もありますが、恐らく藤本委員さんが、イメージされているところと、私がこのお答えしている趣旨が伝わればいいのかと思っていますけれども、ある県におきまして、80 募集をする場合に、80 人では生徒が集まらなくて、60 人しか集まらない学校におきまして、50 人で生徒を取るというやり方をする学校があります。

単純に言いますと、長野県の場合には公立学校および私立学校におきまして、空き定員というのがございます。それで、公立学校の場合には前期、後期試験が終わって空き定員がある場合には、第 2 次募集というものをやりまして、再度生徒募集をして、さらにそれでも空いているというケースがあります。あるいは私立の場合にも空いているというケースがありますが、県によりまして公立と私立の募集定員も極めて厳格に管理して、それがために公立高校が基本的に空き定員がない状態で、最終的にある部分で調整するというやり方をしています。

それにより、結果的に公立高校が不合格になった場合は、その生徒さんは私立高校に行かれるというやり方の形態がございまして、必ずしもそれが本当の意味での 30 人規模学級とか、あるいは少人数学級ということではないかと考えている次第でございます。

さらに地域高校うんぬんという議論はありますが、現状において地域高校は、確か平均

値で32人を下回っているような現状があります。公立の場合では約38人、39人でございますけれども、そういうような現状をかんがえた場合に、ただいま申し上げましたように、いわゆる基本的には少人数、習熟度別授業というものがありますので、そのようなものを活用する方法が適当であると考えている次第であります。

（池上委員長）

ありがとうございました。

それでは、まだいろいろご質問があると思いますが、ここでひとまず打ち切らせていただきます。岡庭委員と熊谷委員から資料をちょうだいしています。

ちょっと簡単にご説明をお願いいたします。

（岡庭委員）

私のほうで、前回欠席して申し訳なかったわけですが、前回の資料をお送りいただきまして、かなり私としては勉強させていただきました。特に北原さんの資料でございますが、やはり非常に結果で分析されていらっしゃると思っているわけですし、私は個人的な立場とすれば、もう県教委の今回の案は白紙撤回してというふうに考えているわけですが、しかしその案が発表になった時点から独り歩きをしていってしまったというわけですし、推進委員の立場とすれば、このことを白紙撤回しろとかしないとかという形でその次元で、やはり議論もすべきではないかと。

その中には、前回も子どもさんたちがいるわけでございますから、早い段階で、やはり高校再編の方向性というものは考えるべきだと思っているわけですし、私も財政問題と考えれば、決して高校改革の問題は避けて通れないだろうと。少子化の問題はございますが、特にこのとき長野県の財政全体を考えれば、どれだけの金額を教育に確保すべきだということは、住む人がどうか、行政とか、あるいは雇用とかのバランスの中で本来考えなければならないことでありまして、それはもう雇用だけを確立すべきだというお考えもあるわけでございますが、そういうことはやはり私は重要視はすべきですけれども、そのことは考えながら、やっぱり全体の財政のバランスを考えていかなければならないと考えれば、高校改革の問題は避けて通れないし、再編の問題も避けて通れないとすれば、それは真剣に我々が具体的な提案をしなければいけない問題ではないかと考えているわけです。

そういう中で、北原さんの提案がございました。これはかなり示唆に富んだ提案でございまして、県教委の再編案と比べてみると、非常にこの地域の実態に合ったものだと思っているわけです。そういう点で、我々として考えれば、北原さんは、資料に記載のように部会設置は反対だと書いてあるわけですが、私とすればやはり地域の教育と、資源ということから考えれば、そこに生きている人たちの範囲の中で十分議論していくべきだという点では、どちらかといえばセクショナリズムになりがちであるし、そういう地域の意識とかいう中で、問題は考えていくべきだと思っているわけですし、何でもかんでも第3通学区というグローバルなところで議論をしていくのが正論ではないかと思っているわけです。

特に先ほどの資料で、旧9通学区、飯田・下伊那地域は、ほとんどよその区に子どもさんたちが行かないということが多いわけですから、そういう点ではやはり第9通学区というのは非常に地形的にも、状況から考えてみても、特殊な地域だと思うわけでございまし

て、南信州広域連合の中では、特に今回の問題について行政と地教委とが、一応の課題だという形の問題で、南信州連合の中に検討委員会をつくって、今、研究を進め始めてきているわけございまして、その内容そのもの昨日の議論も、新聞報道にありましたので、詳しく言ったわけです。

その中から、真剣に考えられたことは、ぜひ第9通学区の問題については、第9通学区の中で十分議論をする、そういう機会をつくってもらいたいということが、非常に強かったわけございまして。

それを、ただ単にセクショナリズムとか、要するに高校改革反対だとかいうものではなく、まっとうに現在の状況を受けて、どういう形で財政問題と少子化の問題に対応しながら、この飯田、下伊那の子どもたちの将来や、飯田、下伊那の産業構造の中で、高校がどうあったらいい教育かということを真剣に考えて、それをこの推進委員会に提案していきたいという、そういう真摯（しんし）な願いの中で議論がされるという形で、ぜひともこの部会設置をお認めいただきまして、議論をさせていただきたいというふうに考えているわけございまして、その点よろしくお願ひしたいと思います。

（池上委員長）

ありがとうございました。

熊谷委員お願いします。

（熊谷委員）

私は、ずっと部会をお願いしていたのですが、今、岡庭委員さんからもお話がありましたように、南信州では新聞報道にあるとおり、具体的に議論が進んできておりまして、どうしても推進委員会に意見を反映させていきたいと、そういう審議づくりをしてほしいというそのような意見でございまして。

その中で、なぜ部会にこだわるかといいますと、時間がないわけございまして。県教委は、遅くとも12月くらいにはまとめて、来年早々には、全体をまとめていきたいという希望ですから、12月といいますと、もう今は7月の末でございまして。従いまして、仮に部会をつくることになると、人選すれば8月は終わってしまう。9月から部会を始めて、つまり1回で終わるわけにはなりませんから、例えば9月、10月、最低でも2カ月必要だと。それをまとめてこの委員会に反映しつつ、推進委員は推進委員会に諮るわけございまして、ぜひ今日あたりで、一定の方向を出していただいて部会を設置するということだと思っています。

その中で、例えば上伊那とか諏訪は、そんなことしなくても良いのではないかという話もあると思うのですが、下伊那でも、そろそろそういう準備と言ったらおかしいですが、広域全体が動き始めておりますので、ぜひ部会を設置させていただいて、その経過でも載せてございしますが、部会としての再編案をこの推進委員会に反映させていただくということございまして、今、岡庭委員も言いましたように、考えている前提を持って議論するのではなく、まさにいろいろな意味での議論を闘わせるということございまして、それを今後、この県教委が決めた推進委員会の中で反映していきたいという地域の思いでございまして、ぜひ趣旨のところに記載がございまして、県教委も既にこの推進委員会を

つくるときに、部会を設置する事は想定していることですから、ぜひご理解をいただきたいと思います。

また第一推進委員会のほうでもそんな方向という報道が出ておりますので、ぜひ時期をみて部会スタートについてゴーサインを出していただければという気持ちでございます。

(池上委員長)

ありがとうございました。

この部会設置の件について、ご意見はございますか。

(小坂委員)

今、部会設置のお話をされましたが、この前私が資料を出してほしいと言った、この資料の6を見ていただきたいと思います。

そうした中で、旧第7通学区、旧第8通学区、旧第9通学区、それぞれ特色があるわけです。最初岡庭委員さんに言われたように、飯田、下伊那は、他校の交流は非常に少ない。上伊那から代表して言うておきますが、ほかへ出ていくのは非常に少ない。だから飯田、下伊那は、全く外から影響を受けないエリアだというふうに思っております。

そうした中で、例えば諏訪、岡谷と、それから上伊那を比べてみますと、非常に似通った面があるわけです。この全体の約1,900人の中で、旧学区外、例えば諏訪でいえば7以外に行っている生徒、あるいは私立へ行っている生徒、比べますと諏訪で大体約500。その中で上伊那が500人、下伊那が300人。こういうことですね。

従って、非常に上伊那と諏訪は似通っているし、しかもここでいきますと、上伊那から諏訪へ行っている人が非常に多いわけです。旧7区の県立全日制、119名。ほかでは、そういう傾向がないわけです。私は、もし部会を設置するなら、先ほどの県教委の示したたたき台は棚上げにして、再出発は必要だと。この第3通学区の中で3校といったなら、それはそれぞれの地域で1校ずつ削減をするという前提があるならば賛成ですけれども、今の時点で部会を設けるといのはいかなものかと。それを前提にした舞台で、それぞれの地域の人が声を上げているのはいいと思いますが、その前提が問題だと私は思っています。

従って、そういう基本的な合意ができた上なら、部会設置も必要だなと思っております。ただ単に、たたき台を是認した上での部会設置はあきらめてもらったほうがいいという、こんな願いです。

(池上委員長)

ありがとうございました。

これは、大変難しい極めて微妙な問題でございますが、また調整をさせていただいて近々に結論を付けさせていただきたいと思います。

(岡庭委員)

今の小坂委員のおっしゃることと、私は全く同感です。

やはり、ここの議論を十分にしてからでなければ、魅力ある高校づくりを議論しても空論だけになってしまうだろうということを考えれば、例えば工業高校の在り方について北原さんも書いてございます。

それから、私どもの第9通学区という意味では商業高校と農業高校がどうなるか、県の案では総合学科にするということになるわけですね。これは多分、果たしてそういった第9通学区飯田、下伊那の経済の発展とか、いろいろなことから認めるかどうかという議論も、実際は第9通学区の中でやりたいわけです。そういうことから考えると、やはり今は前提で議論するということは、小坂さんも発言された、高校改革プランを主体的にやるとするならば、1校ずつ各通学区から減らして議論するべきではないかという、そこら辺の議論はやらないと、急にやったら間に合わないわけです。それでもう何か、県教委の案と白紙撤回とかなんだという議論だけが、並走付議されて行き交うのだけと、それで推進委員会の中で何だか分からないが、魅力ある高校づくりの議論をやっただけだというだけに終わってしまうというふうに私は思いますが、そこら辺で委員の皆さんのご意見も聞きながら。

私はそういう点では、9通学区について、もし認めていただいていたかったら、ここでもし広域連合の高校改革プラン委員会を、特に発展させて、推進委員会ではなしに長野県議会のほうへ、我々とすれば我々の案を、たたき台でない案を提出せざるを得ないというふうに思っているので、そのくらいの覚悟で議論をしていただきたいと思っているわけです。

(池上委員長)

ご意見もよく分かりますが、前回の予定では今日は高校の視察というスケジュールを入れてございます。

特に時間になりましたことと、それを時間で制約するというのはいかがかと思いますが、そういうこともございますので、今日はこれで議論を区切らせていただいて、その問題は後日に譲らせていただきたいと思います。

(岡庭委員)

それは、もう日程的にも無理ですよ。

少なくとも、部会設置をするということだけは第3通学区で決めていただいて、具体的な方法については、次回でということと、部会設置をするということだけをお決めいただかないと、私たちは、次の展開はどうするかということになるわけですから、このところだけぜひ委員長さんのご判断で部会設置をするという前提として、小坂委員さんのお話もあるわけですから、そこら辺を議論していただかなければと思うわけです。

(関 委員)

部会の問題では、熊谷委員さんが最初のほうでおっしゃっていましたが、時間の問題が非常に大きいと思います。これは私どもの推進委員会もそうだったのですが、最初にスタートしたときには、それまでの流れがよく分かっていなかった。検討委員会が、どうい

議論をしてきたか。それから懇話会がどういう議論をしてきたか、ということを分らずに、最初からやり直ししなければならなかったわけです。部会をスタートさせますと、今回また部会のメンバーの方々が、今までの流れを最初から理解するまでに、また時間が掛かると思います。

流れをつかむということの時間も、またロスがありますし、もうひとつは各部会で話し合った場合に結論はどうするか。例えば7通学区で部会を設置して、議論をした結果、県教委の原案に賛成ということになれば、それを尊重するのでしょうか。

非常に難しい問題になると思います。さらに混迷が深まるのではないかと思いますので、私は部会の設置はいかなものかと思っています。

（北原曜委員）

私も、部会設置に反対する立場で、前に資料もお渡ししましたが、4点で反対したいと思います。

この推進委員というのは、利益代表であってはならない。地域代表でもあってはならない。それでそういうエゴを反映してはまずいです。これはやはり大局的見地で、第3通学区全体としてもものを見てほしいと思います。

それから、地域の意見を収集して、この場で議論で反映させればいいわけで、部会をわざわざ設置する理由は、私は見当たりません。現在この第9通学区で、いろいろな動きがありますが、その意見をここで反映させればいいのではないかと思います。

また単位制、総合学科制、あるいはほかの魅力ある高校のアイデアについて、この場でまずは議論しないと話にならないということですね。

そして先ほど関さんがおっしゃったように、部会である案が出てきたとき、この委員会でどうするかです。例えばたたき台と違う案が出てきた、あるいはたたき台を是認する案が出てきた。この場合どうするかです。それを尊重するのか、そのままそれを無視するのか分かりませんが、反映のしようがないわけです。それは議論の場で、やっていただきたいと思います。

以上です。

（岡庭委員）

やはり私は、北原委員の話がよく分からない。まさに学校というのは、地域の経済的コモンズ。コモンズからの信州ルネッサンス革命。コモンズというのは入会地です。みんなの、一人一人のものであり、みんなのもの。それをコモンズ。まさに学校はそういうものであって、だからそれはこの最終報告書に書いてあるわけです。要するに地域の文化的な支援である方法をどうするのかということが決まってくるのだと。それは地域の人たちが考えるべきではないかと。そのことをベースにして考えているのではないかと、最終報告書に書かれているわけですね。

それはまさに第9通学区であって飯田・下伊那、非常に歴史の有る中で子どもを育て、産業を興し、生きてきた。その中で、どのように高校が役割を果たしてくれてきたということは、私はもう伊那のことを議論しても、伊那のことは分かりませんから議論できません、諏訪のことの議論もできない。しかし、飯田、下伊那の人たちはどういう願いを持っ

ているかということは、さっきそのことを聞きながら判断を私はすべきだと。

特に地域の産業に非常に深いかわりをもっているわけですから、そういう願いをしっかりと推進委員会で受け止めて、そしてやっぱりその最終的な高校を出していくべきだと思っているわけです。

（池上委員長）

ありがとうございました。

その意見を、今、おいでの岡庭委員、熊谷委員、川島委員から挙げていただいて、この総意の中に反映するという姿ではまずいということをおっしゃったのですか。

（熊谷委員）

まず1点は、最終報告で、旧12通学区単位で審議をすることが必要になるとわざわざうたって、要綱にも部会設置に触れているわけですね。それを自ら否定するような、今出ていたようなご意見があったこと自体、県教委はどういうふうに考えるか、私は教えていただきたい。

私も最終報告が前提で、この推進委員会作られたのですから、部会設置については当然地域の声を聞く場なのだから参加しているわけでありますので、その点はお願ひしたいと思ひますし、もうひとつは地域代表でも利益代表でもないと位置付けられておられますし、逆に委員という立場で、地域の声をここで反映すればいいとおっしゃられておりますけれども、私は確かに地域の声を3人は、やはりなるべく伝えたいと思っております。

ただそれが、例えば私の立場でいきますと、一民間人ですよね、一民間人が地域の声をどうやって集めるかといへば、それはやはり部会だと思うのです。部会の設置をしていただくことによって、推進員3名が地域の声を吸収して、ここへ反映するというのが部会設置だというふうに思っていますので、部会設置をしたときに地域の声を反映してくださいと、私のような民間人に言われても、一民間人として歩いて聞くのかどうかということですね。

昨日の懇談会についても、私はそれはオブザーバーの立場で参加させていただいておりますから、オブザーバーなので発言もできませんし、この昨日の委員会の意見を反映するかというのも微妙になってくるわけです。

要するに委員という立場から、ぜひ3人が地域の声を反映するためにも、仕組みとして部会を設置するわけで、それをお願いしているわけなので、さっき申し上げるような観点はちょっと違うのではないかと気がしますが、いかがでしょうか。

（池上委員長）

おっしゃっていることはよく分かります。

要するに皆さんのご意見を反映させようとするのはよく分かりますが、そのご意見を今度集約するときに、またどのようなまとめをしていくかということで、委員会も苦闘するでしょうし、時間も掛かるでしょうという世界だと思うのです。

そういうところをどう取るかということは、今度私としては大変悩ましいところだという問題です。

これは逆に言えば、部会は設置されなくてもいいが、新聞を開きますと、それぞれのところで意見がプレスされているわけです。ですから十分反映されるだろうということに私はなと思います。

（岡庭委員）

第1通学区というのは部会設置という方向に流れているわけではないですか。

（池上委員長）

それは事務局からお願いします。

（吉江高校教育課長）

第1通学区におきまして、部会の設置の議論が出ているということで、設置の方向で動いているという認識は私のほうではしていません。

部会はどんなときに設置できるのか、あるいはそれについても委員長の意見はどうかというようなご質問に対して答えたりして、そのやりとりはございました。その中で、部会がいいか悪いかの議論の中で、今、とどまっているということで、現時点におきまして、ほかの委員会も含めまして、部会を具体的に設置するというような話になっているということはございません。それが1点でございます。

それから先ほど来の、いろいろなご意見につきまして若干コメントさせていただければと思いますけれども、まさしく私も想定したものは、もちろん部会は設置できるという形になっておりますが、それはある程度以上、当然ながら煮詰まった段階で、具体的な議論をしていただいて、それを委員会として受けるという全体の準備を整えていただいて、ご提案をしていただくということで考えていただく。

そう申しますのは、その中で本当にいろいろなご意見を、北原委員さんからも、あるいは関委員さんからもいただきましたように、その部会において異なる意見が出た場合に、それを推進委員会でどう決定していただくか。それともうひとつ申し上げますと、例えば南信州で、そういうようなご提案をちょうだいというような、非常に積極的に活発にご議論いただいていると思いますけれども、ただこのようなご提案をいただくとすれば、それをひとつの意見書的なもので、この委員会にご提案いただくということで十分議論も展開できるのではないかと思います。

さらに申し上げますと、この南信州の関係で、たまたま呼ばれまして伺ったイメージからしますと、初めに8校ありきという議論で展開されているのではないかと。それで私も過日は8校ありきというところから議論していただきたいと申し上げましたが、仮に今の時点でそういうようなことで立ち上げますと、どうしても、先ほど来お話が出ておりますように、本来どうあるべきかという議論ではなくて、それぞれの地域において、表現はよくありませんが、固定的なイメージでの議論が展開されてしまって、非常に軟らかい議論が展開されないのではないかと感じている次第であります。



(岡庭委員)

大体議論は、財政問題になって、今度の高校改革の、何で高校改革をやるかという議論があいまいだから、8校ありきだという、少人数の30人学級ありきとか、いろいろな議論になってしまうわけです。

我々は、財政問題がもう根底にあるという、今日の南信州広域連合の委員会の、財政問題が根底にあるということから考えれば、その前提を基に今日配布された資料には、統合した場合に2億円とありました。16校なくなるとすると、32億円ですか。その中で、概算して5億円なら5億円、新たな設備投資をしていくとしても、そういう議論の中でどうするのかという議論があれば、8校ありきという議論の中で議論しなければならないわけです。その場合どうすればできるということをしていくわけですから、そのことは全く部会設置は全く違いまして、ここのところは十分に県教委も真剣に考えてもらいたいと思っています。

県教委の問題の出し方に問題があるのであって、住民の議論に問題があるのではないと思っています。

(池上委員長)

分かりました。

前回、魅力あるということを先行させるという結論でまとめているはずでございますので、この議論は今後とも新たな意見を出していただくということはやぶさかではないということで、いつとき締め切らせていただいて、とりあえず「魅力ある」ということを進めたいと思います。

その後、今度は当然これからどうするかというところに達してまいりますので、そこでまた再燃するかもしれませんが、それはそのことでお見知りおきをいただきたいと思います。

今日は、どうも時間が過ぎてしまいましたが、もう1件第5回の予定をここでちょっと調整したいと思います。

(野村主幹教育支援主事)

推進委員の皆さまには、ご予約の空いているところをおっしゃっていただいているわけですが、皆さん完全に多くの方ができるといことで調整してまいります、できましたら8月上旬は皆さんお忙しいというお話を伺っておりまして、7月と同じように込むなという感じがいたします。

もう一度空けておいていただきたいと思う日は、8月の18日の木曜日でございます。数人の方が都合が悪いとおっしゃっておりますが、午前中が一番空いているかなという形があります。8月18日の木曜日の午前中。

それと、その次のご予定もおおよそ申し上げておりますけれども、8月29日の月曜日の午前中が空いているという方が大勢いらっしゃいますので、とにかく8月18日と8月29日でございますが、空けておいていただければありがたいなと、再度のお願いでございます。

(池上委員長)

ありがとうございました。

日程は、いかがでございますか。

では、そういう方向で調整させていただきます。

今日は、前回お願いしたことを事務局で調整していただきまして、学校の視察ということで予定してあります。ちょっと遅れてしまいまして大変恐縮でございますが、事務局で日程を押さえていただいて、学校の視察をできるだけ組ましていただくように調整をいたしたいところですので、その点よろしくをお願いいたします。

これで、第4回推進委員会の審議は終了し、これより学校視察に入ります。